

ファインプレー

市民広場では、野球の大会が行われていた。

たかしの所属するチームは、試合の真っ最中だ。

「ナイスボール。ピッチャー、その調子。楽にいこう。」

「セカンド、もう少し前で守ろう。」

たかしの大きな声がグラウンドにひびいている。たかしのチームは毎年、ゆう優勝いをする強ごうチームだ。しかし、たかしが、試合に出ることは少ない。練習は休まず行っているが、打つのも守るのも他の人の方がうまいのだ。だから、試合中はベンチから、みんなをおうえんしている。

たかしのおうえんする声でチームのみんながもり上がるだけでなく、正しいアドバイスでピンチを切りぬけることも多い。この前の試合でまん塁るいのピンチを0点でおさえられたのはたかしのアドバイスのおかげだと言っ
てよかった。

キャプテンのゆうじは、

「たかし、ありがとう。あのピンチの時、たかしの声で集中することができたよ。」
と言っていた。



ある日、たかしたちに負けたチー

ムの選手から、

「あいつ、試合にも出ていないくせに……。」

「口ばかりじゃないか。」という声をたかしは、聞いてしまった。



(これでいいのだろうか。自分がしたいことはみんなをおうえんすることなんだろうか。)

そんなことを考えていたせい、よく日から熱を出してしばらく練習や試合を休んでしまった。

熱がおさまってもたかしは練習を休み続けた。

数日後、キャプテンのゆうじが訪ねてきた。

「たかし、体はもう大じょう夫ぶなんだから。みんな君を待っているよ。」

「でも、ぼくはほとんど試合に出られないし、野球をやっている意味が本当にあるのかなと思うんだ。」

「じゃあ、野球やめるのか。」

たかしは、だまっていた。

「たかし、ヒットになりそうな当たりをアウトにすることをファインプレーと言うけれど、君の声そのものがファインプレーだ。試合には出ていないかもしれないが、みんなといっしょに試合をしているんだよ。」

そう言って、ゆうじは帰っていった。

(ぼくの声そのものがファインプレー……。)

たかしには、ゆうじの言葉がいつまでも心に残っていた。

翌日、グラウンドにはたかしのすがたがあった。

「ナイスボール。ピッチャーその調子。楽にいこう。」
たかしの大きな声がひびいていた。

